

開港のひろば

Number
59

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会
発行日／平成10年2月4日（水）

横浜市中区日本大通3番地 〒231-0021 電話(045)201-2100
印刷／中川印刷株式会社



大正初期神奈川青木七軒丁繁盛之図 八木一郎画 熊谷弘一氏寄贈



明治39年測図（国土地理院発行）地形図から

企画展 * 館蔵資料展 *

「横浜の近代 PART IV」

- 大正初期神奈川青木七軒丁繁盛之図
- 中村房次郎あて書簡群

今回は新資料コーナーを設けて、新しく発見された資料の中からえりすぐりのものを展示しているが、次の二件はとりわけ貴重である。

ひとつは、「大正初期神奈川青木七軒丁繁盛之図」と題された水彩画である。現在の神奈川区青木町・栄町・大野町一帯の関東大震災前の町並みを描いたためずらしい資料である。都内在住の熊谷弘一氏から寄贈いただいた。同氏によれば、作者は氏の伯父（母方）の八木一郎氏で、神奈川で酒問屋、結城屋を営んでいた。結城屋は、作者の父、儀平がはじめたもので、儀平は栃木出身とのことである。

絵の作成年は昭和四年とあるので、作者は大震災で壊滅する前の神奈川の町並みを記憶のなかからよみがえらせながら描いたものと思われる。滝の川と旧東海道、東海道線、そして埋立地に囲まれた一帯がていねいに描かれていて、当時の生活を髣髴とさせる。しかし記憶にたよったものであるため、幾分混乱もみえる。

さて、もうひとつの新資料は、中村房次郎あての書簡群である。総数約五二〇通にもおよび、目下、借用整理中であるが、歴代横浜市長や中央・横浜の著名な人びとの書簡が多数みられ、大正から昭和戦前期の横浜政財界の歴史をあきらかにする上で大変重要な資料であるため、所蔵者のご理解をえて、急遽、今回の展示でその一部を展示することにした。

いずれも、以下の頁でくわしく紹介していく。
（中武香奈美）

■館蔵資料展■
「横浜の近代PART IV」から



滝のはし

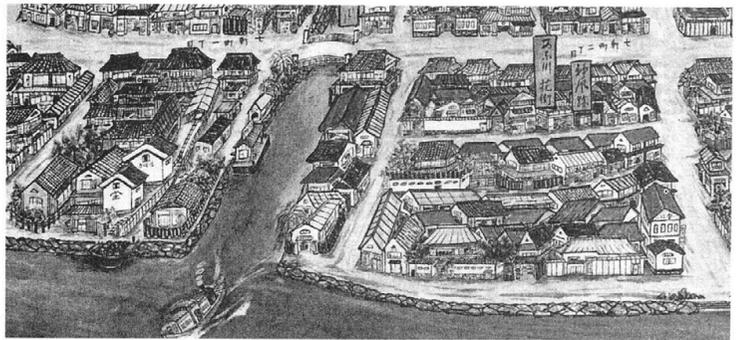
滝の橋は滝の川に架かる橋で、旧東海道は滝の橋を渡って、洲崎明神（洲崎大社）から台町へと向かう。橋の付近には、江戸時代に神奈川宿本陣の石井家があった。近代に入って、海岸部の埋立てが進むと、滝の橋近くまであった海岸線もしだいに遠のき、市街地が形成されていったようすが絵からうかがわれる。
（西川武臣）



『江戸名所図会』

洲崎大社

洲崎明神は旧東海道に面した所に位置している。埋立てが進む以前は、神社の前に「宮の河岸」と呼ばれる渡船場があり、この付近は神奈川湊の中心地であった。沖合には弁財船と呼ばれる大きな和船が停泊し、河岸との間をはしけが結んだといわれている。
（西川武臣）



かな川花街神風跡

絵の右半分が神奈川遊廓の跡地。高島遊廓が永楽町・真金（まがね）町に移転した際、神風楼はそちらを日本人用とし、明治二七（一八八四）年頃、建物を神奈川七軒町埋立地碧海（あおみ）橋際に移築して、これを外国人用とした。

三三年、遊廓の反町移転を機に廃業。この一画の右下に描かれている神奈川電灯会社は、神風楼の自家発電所が二九年に周囲への供給権を得て独立したものである。

左の写真はこの一帯を山側から写したもので、左奥の一画が遊廓である。
（斎藤多喜夫）

結城屋

右絵の左の一画が、この絵の作者の家である酒問屋、結城屋である。土蔵の壁に「結城屋」という屋号が記されている。かなり大きな店であったことがわかる。

敷地内には荷揚げのトロッコが敷かれ、岸にうかがふ小舟に直結していたようすもみえる。

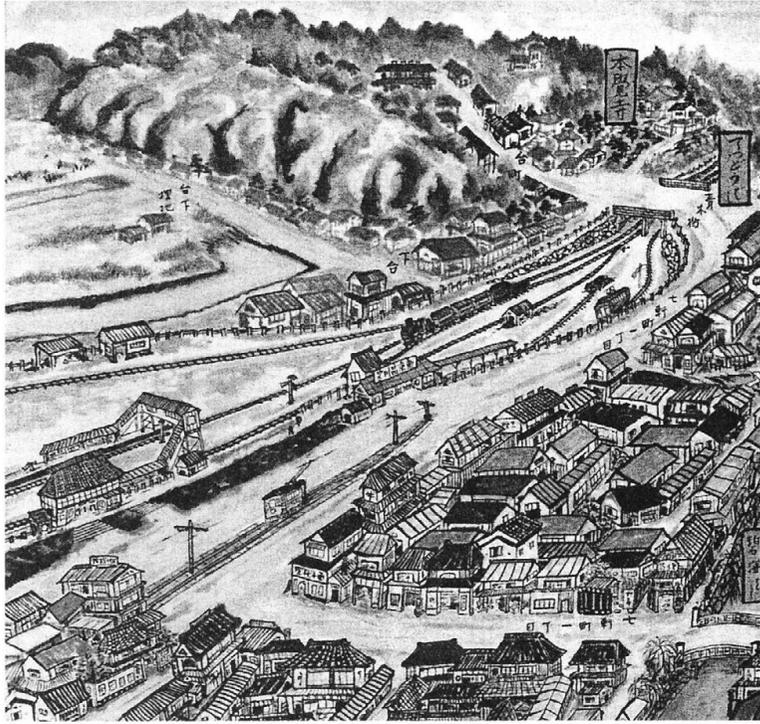
作者の父、八木儀平の名前は、大正一四年の『日本紳士録横浜の部』にみつけることができた。

（中武香奈美）



神奈川 着色写真

大正初期神奈川青木七軒丁繁盛之図



本堂寺

曹洞宗の寺。横浜開港当初、各国の領事館が神奈川の寺におかれたとき、米国領事館にあてられた。文久二（一八六二）年、生麦事件の際、負傷したクラークらが運びこまれ、近くに住む宣教医へボンが治療にかけた。

明治三十七年に再建された本堂は関東大震災で倒壊したが、山門の柱は幕末当時のままに残っている。

（伊藤久子）

神奈川停車場付近

横浜市街電車

「てつどうばし」と記された青木橋の下を鉄道と電車の線路が通り、左方向に汽車と電車が描かれている。一番手前の左下方向に延びている線路が、明治三七（一九〇四）年七月一日に神奈川停車場前から大江橋まで開通した、横浜電気鉄道（神奈川線（第一期線））である。左下の絵はがきは、神奈川停車場前の風景で、神奈川線の電車も見える。ちな

みに横浜電鉄が市営化されるのは、大正一〇（一九二一）年四月一日のことである。

京浜電車

中央の駅舎の屋根に「東京品川ゆき」の看板がかかり、右上方向に延びているのが、明治三八（一九〇五）年二月二日に品川〜神奈川間が全通した京浜電気鉄道である。本来複線の筈であるが、絵は単線となっている。京浜電鉄は四二年に横浜電鉄との間で連絡輸送を開始し、翌四三年には神奈川に乗換用連絡ホームを新設したが、直接連絡は結局実現されなかった。

東海道線

一番本堂寺寄りに描かれているのが官設鉄道の東海道線で、左端の跨線橋のある駅が神奈川停車場（神奈



神奈川停車場 絵はがき

川ステーション）である。絵はがきでは跨線橋を確認できないので、この絵は神奈川停車場の様子をつたえる貴重な資料といえよう。また東海道線（明治二八年からこの名称）は明治一四年までに複線化されているから、神奈川停車場の上の線路は、引込線か何かであろう。

なお明治三十一年には神奈川〜程ヶ谷間の直通線の営業が開始され、神奈川停車場を過ぎた高島町八丁目あたりで、横浜駅（現在の桜木町駅）に行く線路と神戸方面へ行く線路が分かれたが、残念ながらこの絵ではそこまでは描かれていない。東海道線はその後四二年に東海道本線と改称された。

東海道線と京浜電車の競争

明治三八年の京浜電鉄の全通は、東海道線との競争を激化させた。東海道線は新橋〜横浜間に急行列車を走らせ所要時間を二七分に短縮、さらに運賃割引などで京浜電鉄と対抗したが、京浜電鉄も運転間隔を七、八分に、往復運賃を三四銭にして対抗した。しかし大正四（一九一五）年に東京〜桜木町間に電車運転が開始されるや、京浜電鉄の旅客は激減競争に終止符がうたれた。

なお大正四年八月一日には高島町に新横浜駅（二代目）が開業し、旧横浜駅は桜木町駅と改称されている。

（吉良芳恵）

「横浜の外国商館」展余話 時計の輸入商社

前回の企画展示には江口茂氏から寄贈していただいた懐中時計のうち二二個を、関係資料とともに二つのケースに納めて展示した。その解説文を書くにあたっては、受贈資料に含まれる氏の稿本「日本の懐中時計（輸入編）」を活用させていただいた。同氏はすでに国産の懐中時計に関する『日本の懐中時計』（開成出版株式会社、一九八一年）を出版されている。この稿本はその続編として書かれたものだが、まだ出版の予定は立っていないという。

また、近刊予定の当館編『図説・横浜外国人居留地』（有隣堂）には「居留地人物・商館小辞典」が収録されている。ここではそれを補う意味で、江口氏の稿本をも利用させていただきながら、時計を輸入していた外国商社をいくつか紹介する。

フォーク Falk, Charles アメリカ人機械技師 一八五九年八月、横浜沖に停泊中暴風に遭って座礁したアメリカの測量船フェニモア・クーパー号の計器職人であった。同号のブルック船長らは翌年、日本の遣米使節の護衛艦咸臨丸に同乗して帰国するが、フォークはそのまま定住した。元治元年（一八六四）春頃出版された『横浜奇談』に「トケイヤフヨルコ」とあるのがこの人のことだ。日本人には「時計屋」として知られていたことがわかる。居留地の商社・商人名鑑であるディレクトリーには 'mathematical instrument maker' と記されている。

と記されている。
〔所在〕居留地一三番（一八六一）
↓二〇番（一八六三）

ペレゴア商会 Perregaux & Co., F. スイス系商社 ペレゴアは一八六二年頃フランスの保護下に来日。六四年一月二日にオランダ国籍のシュネル&ペレゴアという商社を興したが、翌六五年一月一日にパートナーシップを解消してペレゴア商会を設立した。雑貨の輸出入商社だが、一八七七年版の『ジャパン・ヘラルド・ディレクトリー』に掲載されている

広告によると、スイスのショー・ド・フォンの時計メーカー、ジラルール・ペレゴアの総代理店として、各種時計や宝石の輸入と修理を行っていた。なお、ペレゴアはこの間一八六七年から七〇年までスイス領事館の

書記官を務めている。一八七五年頃からは清涼飲料水の製造業に転じ、その事業はミンガードに継承される。
〔所在〕居留地四四番（一八六三）
↓一三六番（一八六五）↓三二番（一八六九）↓二三八番（一八七五）
七七）

バーガー商会 Barger & Co., E. 一八六四年二月一日、上海のミュラー商会 (Muller & Co., H.) の横浜支店として、支配人バーガーの手で居留地五一番に設立された。開業

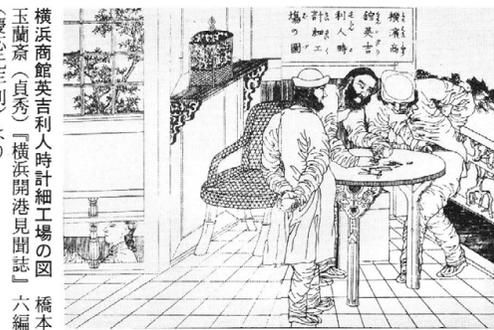
広告によると「クロノメーター、懐中時計、その他の時計製造業」とある。翌年七〇番に移転するとともに、バーガー商会と改称している。支配人からオーナーに昇格したわけである。宝石も扱っていた。
〔所在〕居留地五一番（一八六四）

↓七〇番（一八六五）↓八〇番（一八六八）↓六一番（一八七二）
四）

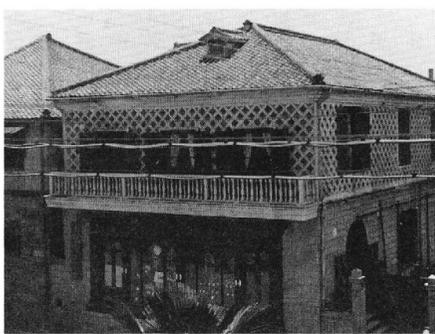
シュワルツ商会 Schwartz & Co., E. 一八六五年、時計の製造とピアノの調律を営業種目として開業。パリとの取引が中心で、宝石や婦人用帽子、パリの流行品も輸入していた。後に横浜で長らく時計輸入業を営んだレツはこの出身である。

〔所在〕居留地一六六番（一八六五）
↓三一番（一八六八）↓八〇番（一八七〇）↓六一番（一八七二）
七四）

ナプホルツ商会 Nahlts & Co. スイス系商社 一八九九年までは社名をナプホルツ&オッセンブルグゲン (Oschenburg) といった。もともと生糸の輸出が専門だが、一九一一年本拠地を本国スイスのニューシャテルに移したシュミット商会の総代理店となり、同社の横浜での事業を継承するかたちになった。シュミット商会からナプホルツ商会に移った



横浜商館英吉利人時計細工場の図 橋本玉蘭斎（貞秀）『横浜開港見聞誌』六編（慶応元年刊）より



ファウルブラント商会 窓越しに時計の陳列されているのが見える。日本シイベルヘグナー株式会社所蔵（横浜開港資料館寄託）写真帳より

懐中時計の販売責任者となった人、シチズン時計の創業者中島与三郎がいる。中島は日本で組立販売を行なうため、帰国したシュミットに依頼して部品を送ってもらい、東京西果嶋にナプホルツ商会時計部工場を設立する。一九二三年にはシュミット二世が来日して経営に当たることになり、名称もシュミット時計工場に変わる。中島は一九三〇年にシチ



シーベル、ウォルフ商会の時計の広告
シーベル & プレンワルトの後身。現在は日本シーベルヘグナー株式会社。



シュミット商会
の時計の広告

ズン時計を設立するが、シュミット時計工場の規模縮小にとまない、そこから技術者を迎え入れたという。
[所在] 居留地九五番(一八八七—一九三一)

ブルール兄弟商会 Bruhl Bros. & Co. アメリカ系商社 一八八八年頃設立された輸入専門の商社。『横浜貿易捷徑』の記載する取扱品目は、時計・宝石・測量等学術用機械・自転車・洋紙・織物類だが、後には自動車・オートバイ・エンジン等各種の機械を扱うようになる。日本人番頭は矢島芳之助。精工舎を興した服部時計店の服部金太郎はここから多量の時計を購入したという。
[所在] 居留地二四番(一八八八—) ↓六一番(一八九九—) ↓二番(一九〇一—〇三)

エストマン商会 Oestmann & Co., A. ドイツ系商社 エストマンはシャムのバンコックから一八七〇年来日し、クニフラー商会やローテ商会で働いたのち一八八九年頃独立。輸入専門の商社で、取扱品目は時計のほか、織物類・ガラス板・皮革製品・製菓・洋酒等。日本人番頭に鶴田勇造がいた。
[所在] 居留地七四番(一八八九—) ↓七六番(一九〇一—)

スイス時計販売所 Depot of Swiss watches 『横浜貿易捷徑』の記載する取扱品目は「時計類及附属品各種」



ブルール兄弟商会の刻印



エストマン商会の刻印



コロソ商会の刻印



オロスジ・バック株式会社の刻印

社名のとおり時計専門店である。支配人はS・コモル、技師はG・シュナイダー。
[所在] 居留地八〇番(一八九三—一九〇三)

オロスジ・バック株式会社
Etablissements Orosdi-Back, Ltd.
フランス系商社 本店はパリ。横浜店は一八九八年から一九〇三年にかけて存在した。「八年しか存在しないのに今日古道具屋にこの商会の懐中時計が割合と出廻っているのは短期間に相当大量に販売した」ためであるとうと江口氏は述べておられる。
[所在] 居留地二六八番(一八九八—) ↓七八番(一九〇一—〇三)

なお、江口氏の挙げておられる次の商社については、『図説』横浜外

ハント商会 Hunt & Co.
ファウルブランド Favre-Brandt
米國貿易商会 American Trading Co.
マロン商会 Maron & Co. (ただしウイガン商会の項)

レッツ商会 Retz & Co.
レーン・クロフォード商会 Lane, Crawford & Co.
ワーゲン兄弟商会 Wagen Freres

また、江口氏は以上のほかに、次のような商社・商人についても考察しておられる。
アンドリユース&ジョージ Andrews & George
ウォルチ商会 Worch & Co.
ウルマン Ullmann, M.
キングマン・シトワーズ商会 Kingdon, Schwabe & Co.
謙信洋行

アイザックス兄弟商会 Isaacs & Brother
イリス商会 Ilies & Co., C.
ウイトロフスキー商会 Witkowski & Co.
オッペンメール兄弟商会 Oppenheimer Freres
コロソ商会 Colomb & Co.
シーベル&プレんワルト Silber & Brennwald
シットレット商会 Schmid & Co.
スミス・ベーカー商会 Smith, Baker & Co.
チップマン・ストーン商会 Chipman, Stone & Co. (ただし米國貿易商会の項)
ジャコブ & コ. Jacot & Co., E.
ジョセフ Joseph, L. S.
デーヴィス商会 Davis & Co., D.
テーラー・クーバー商会 Taylor, Cooper & Co.
トーマス商会 Thomas & Co.
ハーブ商会 Herb & Co., F.
バルッカ Barucca, P.
ビング商会 Bing & Co., S.
ファーナー商会 Fahner, H.
ヘイス Heys, A.
ベッカー商会 Becker & Co.
レーモン&レイリントン Layon & Berrick (斎藤多喜大)

中村房次郎と島田三郎家

中村房次郎あて書簡の発見

昨年末、中村房次郎あての書簡が約五二〇通ほど見つかったと、ご子孫である松崎仁先生からご連絡を頂いた。中村房次郎は、横浜の民政党幹部として、又松尾鉱業(株)、日本カーボン(株)の創設者として知られ、昭和一〇年からは横浜興信銀行副頭取に就任するなど、戦前の横浜政財界のリーダー的存在であった。早速先生のご好意で大量の書簡を拝借、現在整理をすすめているが、これらの書簡は横浜市政と中央政財界との関係を明らかにする大変重要な史料であり、自ずと緊張を余儀なくされる。本稿では、従来全く知られていなかった島田三郎没後の島田家と横浜の関係をみることにする。

内ヶ崎作三郎と島田三郎

内ヶ崎作三郎から中村房次郎あてた書簡が二六通ある。そのうち最も注意を引くのは、島田三郎の長男で、昭和二年から一九年まで第五代早稲田大学総長をつとめた島田孝一の衆議院議員立候補問題に関する五通の書簡である。これらにより二・二六事件直前の昭和十一年二月二〇日に執行された第一九回総選挙で、島田の横浜からの出馬如何が焦点となっていたことが判明する。

内ヶ崎は、明治一〇年に宮城県に生まれた政治家で教育者としても知られる。明治三四年東京帝国大学文科大学英文科を卒業後、オックスフォード

ド大学に留学、帰国後は早稲田大学の教授・理事となり、大正一三年に衆議院議員に当選、以後政治家の道を歩んだ。憲政会、立憲民政党に属し、一六年から二〇年まで衆議院副議長をつとめた。

内ヶ崎は、島田三郎が関東大震災後その病を重くし、十一月四日に七二歳で亡くなった際、葬儀(キリスト教式)を司会するなど、島田と深い親交があったことから、長男孝一の立候補問題に関与したと考えられる。以下書簡を要約してみよう。

島田孝一立候補問題と早稲田大学

〔一月一六日付書簡〕島田孝一の立候補について、一四日に内ヶ崎らが田中穂積早大総長に相談したところ、即答を得られなかったため、永井柳太郎らと今後熟議すること、高田早苗にも電話したが不在だったことが中村に報告されている。

〔一月一九日付書簡〕内ヶ崎はこの書簡で、一八日に永井が総長に面談した際、総長は①商学部の柱石の島田を政治に没頭させるのは損失大②横浜市は立派な代表者を得て利益大、③島田の長所は「学者教育家たる点にあり、政治家としては父君に劣る」との理由で立候補に反対したこと、また永井と高田が電話で話し合い、総長の意見を変更させるのは無理故、島田自身の決心にまかせたこととの緩和策は高田があたることになったことを島田三郎未亡人(横浜の西村喜三郎の娘)に報告したとこ

ろ、未亡人からは、一六日に総長が島田を呼び出し反対意見を述べたこと、その際島田は『私は強いて代議士候補者になりたいのではありません。しかし島田家の今日あるは全く横浜市のためでありませう。父が何回となく選挙を争つても費用は中村氏はじめ少数の方々が負担せられたので、島田家はとうやうや暮しがつてゐるのであります。その横浜市に於て適當なる代表者が無いといふので、考へさせてゐるのであります云々』と答えたこと、また未亡人も息子の

答弁は「我が意をえたものである」と賛同していることを告げられた、と中村に報告している。その上で、島田の決心を待つしかないこと、万一の場合は総長と島田の関係緩和が大切で、小山松寿や増田義一が仲介方を快諾したことを記している。この書簡により、島田が横浜市方面(つまり中村房次郎)から立候補の要請を受けたことが推察できる。また、島田三郎の国政への参画は中村らにより支えられていたことが明白となった。

〔二月一〇日付書簡、速達〕島田問題が新聞の噂にのぼり始めたこと、解散当日の二日に中村邸で島田と会い態度を決定してもらおうよう手配したことが報告され、中村にその了承を請うている。なお島田の中村邸訪問は見舞を装うよう、慎重な配慮がなされていた。

〔二月二日付書簡、速達〕島田との会談後、内ヶ崎は平島吉之助へ、島田に横浜情報を直接伝えるよう希望する速達を出したことがわかる。内ヶ崎は、島田自身には先輩を押しつけて立候補する意志はないが、次期立候補では父沼南の記憶も薄らぐ故、横浜市が推薦を確定すれば、教務主任を辞して推薦に応じる覚悟があると判断したことを中村に伝えた。

伊沢多喜男と原富太郎の仲介

〔二月二六日付書簡、速達〕内ヶ崎が伊沢多喜男を訪問し総長を動かすことを依頼したこと、総長が依然立候補に反対で、島田も総長の意志に背いてまで立候補する気はなさそうなのが報告されている。また「貴下御病中のことなれば原氏を煩はして総長と折衝せしめらるゝこと妙案と存候。御成功をいのり申候」と、早稲田出身の原富太郎の仲介を期待し、自身は選挙区仙台に帰るため、後のことを永井に依頼したことが述べられている。また横浜側へは平島を連絡役にすることを希望した。

以上五通の書簡から、島田家が横浜からの要請をうけて孝一の立候補に動いたにもかかわらず、田中総長の反対にあったことを見えた。その際、中村ら横浜の民政党幹部と島田家とのパイプ役を担ったのは内ヶ崎であった。結局島田は出馬をしなかったが、この選挙では、横浜市中から民政党の戸井嘉作と飯田助夫、社会大衆党の岡崎憲が当選した。今回大変貴重な史料を提供下さった松崎仁先生に、心よりお礼を申し上げます。(吉良芳恵)

鶴見区 添田家の柳北遺詠

本誌第五十六号で港北区の飯田家邸内の成島柳北碑を紹介した。碑は川崎在の小向村梅林にまつわる石像で、柳北が、幕末の一時期、横浜に駐在し、しばしば江戸と往来したことを述べた。本稿では、その途次、彼が心に留めた東海道筋の旧家との因縁譚を紹介してみよう。

添田家の柳北遺詠

昨春、鶴見区の添田有道氏宅で、成島柳北の掛軸を拝見した。詩と歌の短冊を表装したもの(写真)。

癸未十一月二日賞菊於添田君

采秋園席上賦此呈主人

栗里誰言跡已陳／黄花風格

逐年新／古今雖異賞心一／

吾亦田園婦去人

采秋園に菊をめてて

かへりなは／いく年経なむ／仙人の／すみかに似たる／菊の花
その

題詞によれば、癸未(明治十六)

年十一月二日、柳北が添田家の菊園に遊び、即興に詠んで主人(采秋は知通の雅号)に贈ったものである。

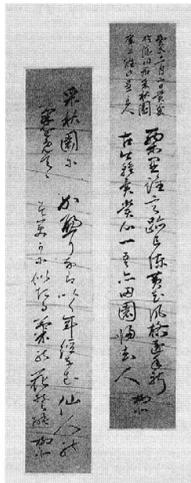
柳北は、一週間後の九日付『朝野新聞』雑録欄に、「看菊余言」と題する当日の観菊記を発表している。文章は、「今ヲ距ル二十年前漁史横浜



添田蔵書『柳北奇文』

野毛ノ陣
營二三兵
伝習ノ事

ヲ督ス当時該地ヨリ江城ニ往来ス月ニ幾回ナルヲ知ラズ、途中の街道の家並・村落の悉くを目に焼付けたが、その中に、川崎宿の南郊市場村に一目で豪農の家と知れる大屋があったとの懐旧談が始まる。この度、社友堀口(記者の堀口昇か)から知人の添田知義(知通の嗣子)宅へ観菊の遊びにと誘われ訪ねたところ、その家こそ、昔見た市場村の大屋であった。「主人雅事ヲ好ミ園池亭榭頗ル風致アリ就中菊ヲ培養スルニ長セリ其ノ園内ニ栽ル所無慮一百余种而最モ愛玩ス可キモノ五十種許リヲ摺ンデ之ヲ前庭ニ列植ス黄白紅紫爛漫



添田有道氏所蔵

合同演習、またフランス軍事教官団による三兵伝習に明け暮れた。「東風二月未帰家／走馬夕陽鞭影斜／隣殺野毛山下路／鉄蹄日々蹴飛花」という、武人柳北の馬上の詩がある。しかし、訓練の間には神奈川台や江ノ島に遊んだ。早朝、砲兵・歩兵の隊長らと墨堤の花見に遠乗りしたのが発覚し、「陸軍ノ頭共ハ多人数遊山ニ出掛ケ、甚タ不行跡ナリト劾サレ、一同甚タ困却シタ」という。柳北が横浜を去るのは、三年九月二十日。訓練場が手狭となり、諸隊は順次江戸に移動していたが、この日柳北は最後の残留部隊を引率した。旭日旗に朝日が輝き、兵馬は肅々と陣営を進発、「来时兵員不為伍」も一年半余ののち「去時整然大隊成」という。やがて、幕府最強の精鋭部隊として薩長軍を悩ますことになる(引用は『柳北全集』)。

農兵隊取締役添田七郎右衛門

当時、横浜近郊の農村部では、開港後の物価騰貴、社会秩序の混乱のなか、農村共同体の防衛を目的に農民兵の組織化が進められた。

太田陣屋の柳北

騎兵頭並成島柳北が、横浜陣営築造掛として赴任したのは、慶応二年(一八六六)正月八日であった。以後、陣営整備、洋式騎兵伝習の責任者として太田陣屋に起居することになる。この間、イギリス駐屯軍との

橋樹郡市場村名主の添田七郎右衛門(知通)は、川崎宿助郷総代、寄場組合大総代を勤め、さらに慶応二年九月、武州一揆に危機感を深めて五十名の農兵取立を建議、取締役に任せられた。稽古場には屋敷地を提供し、翌三年末には代官所から鉄砲の貸与を受けた。農兵の服装は、羽

織に胴服・ズボン、革帯をつけ、「稽古中は不及申、平常共身分相慎、喧嘩・口論等致間敷」、銃は「大切に御預申、御筒は時々磨方手入仕、錆付不申様取扱付」と厳しい規律を申し合わせた。添田は、流動化する幕末社会の中で、一村の枠を越え、押し出されていた。鶴見川の川上、綱島寄場組合大総代の飯田助太夫にあっても同じであった。そしてこの経験は、やがて次の時代に地方名望家として活躍する下地となった。

柳北と添田は、奇しくも、幕末の同時期、訓練の指導に当たっていた。一方は幕府権力の強化を目指した洋式伝習、一方は郷村の治安を守る農兵訓練の責任者として。それから十余年後、柳北が、偶然に添田を訪ねる。観菊の雅遊を機縁に。柳北の文章は何も記していないが、往時の三兵伝習や農兵訓練は話題に上ったのだろうか。幕府崩壊後、柳北は、陶淵明を理想とし、向島の「松菊荘」に隠遁、在野の文筆家として名をなした。采秋園の詩、「栗里」「田園婦去」等の用語にもその傾倒ぶりが窺われる。知通は、維新後、神奈川県に奉職、地租改正作業や税務畑で県政上に大きな功績を残した。今も熊野神社境内に寿蔵碑が残る。風雅の道に通じ、歌稿集『倭雅於毛以』があり、また大変な蔵書家で、家蔵目録に『柳橋新誌』『柳北奇文』の二本が含まれている。(佐藤孝)

閲覧室から

今回は、大正期に横浜で発行された日本語新聞のうち、今年度複製したものを二紙紹介したいと思います。当館では、今後横浜だけでなく、神奈川県内各地で明治期・大正期に発行された新聞も収集していく予定です。この時期の新聞は、原紙がほとんど残っていない貴重なものでもし、そのような新聞に関する情報がありましたら、是非当館までお知らせください。

【日米新報】

初音町一丁目九番地の日米新報社から、月三回発行された新聞。創刊月日は不明だが、複製した同紙二一号は大正五年三月二五日に発行されたもので、それによると大正四年五月二五日に第三種郵便物認可がおりており、号数からしても大正四年に創刊されたものであろう。

二一号は四頁だてで、米國航路の運航をしていた東洋汽船会社の地洋丸に乗船し来浜した、米國の飛行家アート・スミス一行、トーマス・クックとボストンの観光団や、ハワイ及びサンフランシスコに向けて出航する春洋丸に乗船予定の、早稲田大学の野球選手など、乗客に関する記事が多く記載されている。そのほか、渡米に関する手続きに関する記事や、渡米汽船賃金表、横浜港米國行汽船出入表などがある。

同紙の発行部数や終刊年月日は不明である。

【花月新聞】

花月園は、東京新橋の料亭「花月」を経営する平岡広高が、大正三年五月に開園した遊園地で、パリ郊外のフォンテンブローのものを模したといわれる。

『花月新聞』は、花月園の広報紙といった性格のものである。複製した同紙八号は、大正一〇年五月二九日に橋樹郡鶴見町の花月新聞舎から発行されている。毎日曜日発行とあるので、創刊は同年四月であろう。

八号は四頁だてで、平岡園主の米國遊園地視察旅行への出発が同年六月七日に決まったことから、その関連記事が紙面の多くを占めている。そのほか、同園で行なわれる活動写真、人気のあった花月少女お伽劇団の芝居など余興のプログラムや、売店の広告などを掲載している。

同紙の発行部数や終刊年月日は不明である。

以上の新聞の原紙は、全て羽島知之氏が所蔵されていたものです。

(上田由美)

● 閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室とします。
平成10年2月24日(火)～27日(金)
また月末整理日のため、左記の日も閲覧室は休室になります。
平成10年3月31日(火)

ご理解とご協力を、よろしくお願いたします。

資料館
だより

▼ 展示

- (1) 「館蔵資料展 横浜の近代-PART IV-」
2/4(水)～4/26(日) 開港期から明治大正期にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時々姿を表現する特徴的な資料によって紹介します。
- (2) 「開化期の横浜市民」(仮称)
4月29(火)～7月下旬 明治初期の横浜を舞台として、新旧文物の交錯と新しい文化の創造の動きを、政府と民衆の双方の動向から探ります。
- (3) 「アーネスト・サトウと武田久吉」(仮称)
8月上旬～10月下旬 当館が所蔵する明治期の英国外交官 E. サトウと植物学者武田久吉父子の資料を通して、サトウの足跡をたどります。

▼ 寄贈資料

- (1) 紙製ベスト(昭和20年頃の配給物資)
1点(青葉区しらとり台 毛利春夫氏)
- (2) 横浜市尋常第一日枝小学校新築記念撮影ほか絵葉書 4点(南区南太田町 増田好夫氏)
- (3) 軍事郵便・航空郵便(占領軍検閲)
6点(旭区川島町 鈴木助三郎氏)
- (4) 「関東大震災画」(ペン画帖)ほか 3点(福島県福島市飯坂町 花澤繁氏)
- (5) 最近調査地入横浜新地図 大正12年



▲絵はかき「横浜浮世絵」 横浜浮世絵の世界で、数々の傑作を残した五雲亭貞秀の作品。万延元年(1860)～文久元年(1861)製作。5枚1組・400円(本体価格) 当館・受付で販売

- (複製) 1点(横須賀市追浜本町 櫻井孝之助氏)
- (6) 水彩画「大正初期神奈川青木七軒丁繁盛之図」1点(東京都墨田区 熊谷弘一氏)

* 展示記念講演会が盛況に開催 *

昨年12月13日(土)、横浜シンボリア(産業貿易センタービル9階)で開催された「横浜の外国商館—貿易商社の源流」展示記念講演会には、定員250名のところ385名の方に応募していただき誠にありがとうございました。

講演は、当館調査研究員の斎藤多喜夫が「横浜の外国商館について」と題して、開催中の展示の理解をさらに深める内容の話しをしました。続いて、作家の吉村昭先生には「生麦事件について」の演題で、事件のあらましから、現在『新潮』(新潮社)に連載中の「生麦事件」の取材や執筆の裏話ともいえる興味深い話しもしていただきました。

受講者の方たちには、最後まで熱心に耳を傾けていただき、講演会終了後の展示見学会にも多数の方に参加いただきました。重ねて御礼申し上げます。

